

2016 リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック大会における ボランティアの参画意識（速報）

片山昭義〔浦和大学総合福祉学部〕

キーワード：オリンピック、パラリンピック、ボランティア、参画意識

1. はじめに

2016年夏、南米初のオリンピック・パラリンピック大会（以下、本大会とする）がブラジル・リオデジャネイロ（以下、リオとする）で開催された。オリンピックは206の国・地域から28種目306競技に出場選手10,500人、パラリンピックは159の国・地域から22競技528種目に出場選手4,342人を集めた大会であった。急速に経済発展しつつあるブラジルにおいて、2014年のサッカー・ワールドカップ開催に続くメガスポーツイベントの開催は、全世界の注目を集めるとともに、更なる発展が期待されるイベントであった。

しかしながら、政治不信や経済格差を起因とする国内情勢の悪化、伝染病の流行、開催都市リオにおける犯罪率の上昇は、大会開催の大きな不安要因となった。

このような状況においても本大会の準備は進められ、ボランティアについては5万人の募集に対して、全世界から30万人の応募があったと言われている。大会運営に関わったボランティア達は、どのような目的を持って参加したのか、また参加してどのような成果を実感したのだろうか。本大会の開催期間を通して現地に滞在したことを機に、ボランティアに対するインタビューを通してその実際を確認し、2020年東京大会に向けたボランティアマネジメントの一助としたい。

2. 方法

2-1 現地への渡航機会

2016年8月5日～21日（オリンピック期間）及び同年9月7日～18日（パラリンピック期間）において、現地に「Tokyo2020 JAPAN HOUSE」（以下、ジャパンハウスとする）が設置された。ジャパンハウスは、本大会を通して、日本を全世界に向けて発信する場として、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が東京都や関係省庁と連携し主催するもので、2020東京大会や東京・日本全体を盛り上げる中核として機能することが期待される施設である。この中でスポーツ庁は、わが国のスポーツ・レクリエーションの魅力を最大限発信することを目的として参画し、その業務を公益財団法人日本レクリエーション協会（以下、日本レク協会とする）に委託、日本レク協会の指導者養成課程認定校である本学の担当者として筆者が現地派遣スタッフとして委嘱され、全期間を通してブラジルへ渡航する機会を得た。

2-2 調査方法

ジャパンハウスのスポーツ庁ブースにおいて、一緒に活動したボランティアスタッフである現地の日本人留学生の協力を得て、本大会において公式のスタッフユニフォームを着用したボランティア20人に対して、大会会場内や路上にてインタビューを実施した。インタビュー時間は平均20分程度であった。インタビューの内容は手書きのメモで記録し、当日の夜に共通のフォーマットを用いて整理した。

2-3 質問項目

- 1)回答者の基本情報（名前、年齢、性別、居住地、リオ以外の場合の滞在先、ボランティアの活動期間、その他）
- 2)家族の理解
- 3)報酬（報酬の有無、支給品、食事、交通費、その他）
- 4)活動内容（役割決定の方法、実際についている役割）
- 5)ボランティアの選考方法
- 6)研修内容
- 7)参加動機
- 8)メリット（活動して良かったと思えたこと）
- 9)デメリット（活動していて残念に思えたこと）
- 10)本大会を通してブラジルに残った成果（レガシー）



インタビュー風景

3. 結果

主な内容を以下にまとめる。

- ・居住地については、リオ以外から参加している方が多く、その滞在先はリオ近郊の友人や親戚宅、もしくは研修等で一緒になったボランティア仲間と共同で家を借りて住む等であった。その際の費用やリオまでの交通費は一切支給されない。
- ・報酬については、同じユニフォームを着ていても有償と無償のボランティアが存在するが、その数は無償が多数を占めるようである。ボランティアには有償・無償共通してユニフォームやバッグ、活動時間中の食事券、公共交通機関の無料パス、そして活動するセクションによっては競技の観戦チケットも配布されているようである。
- ・参加動機は「オリンピックに関わる仕事がしたい」「オリンピックのボランティアが夢だった」など憧れの活動に取り組みたいということや、「自分の可能性を広げたい」「新しいことに挑戦したい」など自身の経験値を高めることが主な動機であった。
- ・メリットに関しては「世界最高峰のプレイが間近で見ることができた」「選手とコミュニケーションが取れた」「素晴らしいイベントをつくっている一員としての実感」など様々な意見が寄せられた。
- ・デメリットとしては「全く問題ない」とする人がいる一方で、大会事務局のオペレーションについて不満を抱く人が多く存在した。
- ・レガシーについては「交通機関の整備」を挙げる人が多く、「経済が成長」「治安改善」等が意見として続いた。その他特筆すべき事項として「サッカーだけの国だったが、様々なスポーツの可能性が見い出せた」との意見もあった。

4. おわりに

今回のボランティアへのインタビューを通して3点の気付きがあった。1点目は「ボランティア＝無償」の考え方。2点目は「ボランティア自身のモチベーションの醸成」。3点目は「ボランティアのマネジメント（評価の仕組み）」である。イベントの成否を分けるボランティアの活躍を最大限に引き出すことが、次期開催の東京大会においても大きなポイントとなるであろう。